# 郷土の画人佐川華谷と武藤光蓬

**那珂市歴史民俗資料館**

佐川華谷は慶応３年(1867)生まれ、旧水戸藩士松平雪江に師事した。その後辰ノ口(常陸大宮市)の野沢白華の門人となり、茨城県警巡査として奉職しつつ絵の制作に励んだ。明治３７年(1904)、師の白華が死去した後上京して小室翠雲に師事し、荒木十畝とも交流した。大正９年(1920)の第２回帝国美術展覧会に初出展し、入選作品が宮内省御用品となった。その後も帝展や茨城美術展出品(無鑑査)と創作活動に励み、晩年には茨城県に「富嶽図」を寄贈している。昭和２１年(1946)、東京にて７９歳で歿した。

華谷の「富嶽神龍之図」(個人蔵)は、昭和５年(1930)華谷が６３歳の時に描いた６曲１隻の屏風図である。華谷は、この画賛の中で「富士山は最高の霊峰であり、龍もまた鱗蟲(鱗のある虫類)の長たるものである。その龍が、さらに最高峰の富士を越えようとしている。ここには、旺盛な向上心を見ることができる。この姿は、修養精神の資とするに十分である。」と訴え、見るものを励ましている。

武藤光蓬は明治３２年(1899)生まれ、本名を質三といった。太田中学校を卒業後上京して永田春水の内弟子となる。近衛歩兵隊を除隊後、同郷の先輩画人佐川華谷の勧めで荒木十畝に師事して研鑽を積んだ。大正１２年(1923)第１回茨城美術展に出展して初入選を果たし、その後も茨展に積極的に出展した。これからの活躍が期待される昭和１６年(1941)、病を得て４３歳の若さで東京にて歿した。

光蓬の襖絵「双龍図」(鱗勝院蔵)は、「質三」の署名であることからまだ雅号を得ない初期のころの作品と思われる。上方を泳ぐ吽形の龍と下から昇ろうとする阿形の２匹とが競い合って雲を涌かせ風を起こす姿は、勇ましく勢いがあり迫力に満ちた作品である。大震災に見舞われた東日本の人々に大きな勇気を与えるものでもある。正月にふさわしい作品に、「雪に梅」、「ボタンに小鳥」、「松に鷹」(個人蔵)が描かれた彩色画がある。伝統画に近代画法を取り入れた作風に変化する素地が見られる。